

- 📖 ミステリイを読んで先生に
- 📖 私のお薦めの1冊
- 📖 2003年度 前期貸出ベスト10
- 📖 2003年度 図書館ガイダンス報告
- 📖 インドネシアについての公開授業



## OBIRIN UNIVERSITY LIBRARY

### ミステリイを読んで先生に

経営政策学部教授

岡田道一



図書館をよく利用するほうだと思います。もっとも、お借りするのは、専ら軽い読み物で、大学図書館の本来の役割を考えると、教員としては忸怩たるものがあります。

振り返ってみると、半世紀にわたる図書館とのかかわりで、勉強のため通ったのは、30年ほど前の留学中、ハーバードロースクールの図書館くらいです。丁度、日本で話題に上がり始めたプロダクト・ライアビリティの文献、判例を調べては会社へ送り、担当者には難迷惑だとこぼされました。

樋口一葉の本によると、日本における最初の近代的な図書館である上野図書館は、当時入館料が必要だったそうです。一葉が貧しい家計をさいて、図書館で本に向かっている様子を想像すると、ひき較べて、幸せだと思つとも、もう遅いのですが、読書の姿勢を反省もします。

手当たり次第に、為にもならない本を読む癖がついたのは、私達が育った戦後の物不足の故かと思われまふ。食物も不足していましたが、本はもっと不足していて、何時も活字に飢えていました。飢えを癒すためには、選んでいる余裕などなく、まず、あるものを読んだわけです。

小、中学生にかけて、郷里の城跡にあった市立図書館に通いつめました。唯一、覚えているのは、戦前の東京六大学野球の全試合を詳細に記録した大部な本を、貴重な戦史のように読んだことです。

では、為にもならない、くだらない本ばかり読んできて後悔しているかといえば、そうでもないのです。だから、くだらない人間になったのだと言われれば、返す言葉もないのですが。

私が比較的知っている国はアメリカです。短い

間でも暮らし、ビジネスでは何度も滞在し、ニューヨークには50回以上訪れています。その米国についての知識の多くは、恥ずかしながらというべきでしょうが、2000冊程度は読んだミステリイに負っています。ミステリイは謎解きというよりも、むしろ風俗を写すもので、ハーバードのケーススタディを数多くこなすことで、ビジネスを知るように、ミステリイを通じて社会を知ることもできます。偏った、効率の悪い方法だと思われるかもしれませんが、楽しんだ上でのおまけですから悪くないと思います。

ここで思い出す事があります。私が未だ新入社員だった頃、ある雑誌が最も感銘を受けた本というテーマで、経営者のアンケート特集を組んだ事があります。当時、山岡荘八の徳川家康という長編が大ベストセラーで、この本を挙げた経営者も少なくありませんでした。山岡荘八という人は大衆作家と見られており、それだけで私は、読んでもいないのに、この本を挙げた経営者を、教養も見識もないと軽蔑しました。

今では私も、判っています。人は自分の能力以上のものを読み取ることはできず、どんなに立派な本を読んでも何も学ばない人もいれば、どんな本からでも何かを学ぶ人もいます。山岡荘八からでも学べる人だから立派な経営者になれたのだと。

この世に不美人とくだらない本は存在しないというのが私の信念ですが、残念ながら、くだらない本はないといえは嘘になります。しかし、人がそんな本からでも何かを学び、引き出す事ができれば、その時、くだらない本は消滅するのです。

図書館の良い本も、くだらない本も皆さんに見出されることを待っています。

# 私のお薦めの一冊

図書館事務部長 **袴田次雄**



私の手元に一冊の本がある。「青年期をどう生きたか...一冊の本との出会い...私立短期大学図書館協議会創立二十五周年記念講演録」。

桜美林大学図書館も加盟している標記協議会が昨年度創立二十五周年を迎えたことから、何か記念事業をやるということになって、関係者で相談の結果、最近の若者の読書離れが激しいと言われるようになってから久しいことから、学生に啓蒙となるような講演会を企画することになった。具体的には、この協議会加盟の7つの地区でそれぞれの地区の主体的判断で合計8人の講師に「青年期をどう生きたか...一冊の本との出会い...」という共通のテーマで講演を依頼し、それを「講演録」として出版することにした。

講演会は、従来の図書館職員の講習会・研修会とは異なって、単に図書館職員の参加だけではなく、在学生や一般市民にも呼びかけ、大変多くの参加者を得たことも特徴的であった。

目次を開くと、数々の文学賞を受賞した著名な3人の作家、佐藤洋二郎氏「父と母、そして本から

学んだこと」、原田康子氏「私の読書遍歴」、加藤幸子氏「J.グリーンから尾崎翠まで 青年期の自己形成と読書」の講演があり、また図書館建設で著名な鬼頭梓氏「建築家になるまで 戦時下の青春を中心に」や、図書館学者で著名な塩見昇氏「道を拓く 山と図書館」などが見える。

それぞれの講演は、それぞれの著者の青年期の自己形成過程で受けた様々な本との出会いについて語られていると同時に、たくさんの著作が紹介されている。これだけでも推薦図書リストの役割を果たしている。

図書館では、学生の読書生活を支援するために近年、朝日、毎日、読売、日経の各新聞掲載書評本や、定評ある新書類を可能な限り備え付けることにしており、今回この講演録に紹介されている著作についても、入手できるものについては購入して、利用に提供し、図書館の蔵書構成を豊かなものにしてゆきたいと考えている。是非利用していただきたいものである。

OBIRIN UNIVERSITY LIBRARY OBIRIN UNIVERSITY LIBRARY OBIRIN UNIVERSITY LIBRARY OBIRIN

## 2003年度 前期貸出ベスト 10

### － 図書編 －

順位	タイトル	貸出回数
1位	『グローバル化の現在』	21回
2位	『人間の心理学：モチベーションとパーソナリティ 改訂新版』	19回
3位	『異文化コミュニケーションキーワード新版』	17回
4位	『南北問題と開発教育：地球市民として生きるために』 『人権・平和』	16回
6位	『児童労働：廃絶にとりくむ国際社会』 『スティグリッツ入門経済学 第2版』	15回
8位	『カナダ政治入門：カナダ政治理解への多角的アプローチ』 『概説国際ビジネス入門』 『ヨーロッパ国際関係史：繁栄と凋落、そして再生』	14回

### － 視聴覚資料編 －

順位	タイトル	貸出回数
1位	『GO』	14回
2位	『紅の豚』	12回
3位	『海がきこえる』	11回
4位	『グッド・ウィル・ハンティング：旅立ち』 『A.I.』 『ホーホケキョ：となりの山田くん』 『魔女の宅急便』	10回
8位	『サイダーハウス・ルール』 『シザーハンズ：特別編』 『高慢と偏見』 『リトル・ヴォイス』 『ライフ・イズ・ビューティフル』 『Chocolat』 『エバー・アフター』 『カッコーの巣の上で』	9回

## 2003年度 図書館ガイダンス報告

図書館では、新生を対象に毎年図書館ガイダンスを行っています。今年度行ったガイダンスについて報告します。

**新入生オリエンテーション** 新入生のオリエンテーション期間に行われた「図書館新入生オリエンテーション」は、今年度は文学部の健康心理学科(約130名)と短大英文科(約280名)の新生を対象に開催しました。これは、大教室で図書館のフロア案内やサービスについて約25分間、スライド画面を見てもらいながら図書館職員が説明を行いました。今までは、要請のあった学部に対して行っていたのですが、次年度はより多くの学部で行えるよう調整中です。

**新宿キャンパスガイダンス** 新宿キャンパスの大学院新生(約50名)を対象に、大学院のオリエンテーションの中で15分間時間をもらい、今回初めて実施しました。新宿キャンパスの学生に対しては、図書館ではデリバリー便で貸出返却を行っています。このような特殊事情のため、デリバリー便による貸出返却の方法、そして、院生からの利用が多数見込まれる他大学図書館の利用や文献複写等の申込方法について、図書館ホームページからの資料の検索を実演しながら説明を行いました。

**情報検索ガイダンス** この「情報検索ガイダンス」も、今回初の試みでした。今まで図書館では「新入生オリエンテーション」と「図書館ガイダンス」を行ってきました。しかし、すべての学生が受講できていない現状がありました。また、入学したての時にガイダンスを受講していても、忘れてしまっていたりすることもあるでしょう。レポートや卒論を書かなければならない時期になって、図書館が上手く使えるかどうかが重要になってくると思います。このような状況を改善するため、今回は図書館利用者全員が受講できるガイダンスを企画しました。果たして受講希望者が来てくれるのだろうか、どんな内容でやろうかという不安もありましたが、定員10名に対し、4名の申し込みがありました。当日は2名欠席のため、2名の受講となったのですが、マンツーマンで指導することができ、OPAC検索、雑誌・新聞記事検索、桜美林大学図書館に無い資料の利用について、検索のコツなど、充実した内容を提供できたと思います。受講されたお二人からのアンケートでは、ガイダンスの満足度は80～85%ということでした。図書館では、これからもこのような機会を設けたいと考えています。

OBIRIN UNIVERSITY LIBRARY OBIRIN UNIVERSITY LIBRARY OBIRIN UNIVERSITY LIBRARY OBIRIN

### 図書館ガイダンス

例年、国際学部と経済学部を中心に「図書館ガイダンス」を実際に館内を案内するツアー形式で行っています。これは、1年生の基礎ゼミの授業において実施されます。今年度は、国際22回、経済6回、BM1回、健康心理1回、合計30回実施しました。この「図書館ガイダンス」は、学部や先生からの要請で行います。1回に約10名から20名の参加があり、図書館の概要を紹介するスライドの上映(約15分)【写真1】そして情報メディア室、本館、分館を実際に見てもらいます。本館では桜美林大学図書館の蔵書検索であるOPACの検索【写真2】、分館では新聞・雑誌記事などの検索も実際に行ってもらいました。



【写真1】



【写真2】

## インドネシアについての公開授業 図書館職員の三上さんが公開授業を行いました！

『たくましく生きるジャワの人々とそのもてなし』

日時：2003年6月20日（金）2時限目

場所：待望館905



【写真：ジャワ島西部の紅茶農園とそこで働く人々の集落】

図書館分館で働いている三上彰さんが、学生時代に深く関わったインドネシアについて公開授業を行いました。

三上さんはインドネシアのジャワ島に合計4回の調査に訪れ、大学時代に「紅茶産業の調査」を、そして大学院では「ゴミとリサイクルと廃品回収業の調査」を行っています。アジアについて研究されている奥野先生が三上さんのインドネシアでの体験談を聞かれ、この授業が開催される運びになったとのこと。

授業当日は、インドネシアの民族衣装を着て登場。約70名の受講者がいました。

まず、概論ということでインドネシアとジャワ島の民族、言語、宗教、文化、気候、政治などについて説明がありました。インドネシア語は「アルファベットを用いているし、繰り返し言葉が多く、かわいい感じなのでとっつきやすいのでは」とのこと。例えば男の子は「ラキラキ(Laki-Laki)」イカは「チュミチュミ(Cumi-Cumi)」など。また、気候はかなり暑く、蚊が多い。虫除けグッズを見せながら現地の人々の蚊の対策方法などを紹介されました。

続いて、調査についてのお話。最初にインドネシアを訪れたのは大学2年の時、紅茶の調査だったそうです。紅茶農園のゲストハウスで食べきれないくらいの食事を出してもらったが、2日目でダウン。6人のグループで調査に訪れたそうですが順番に倒れ、三上さんは帰ってきてても調子が悪く肝炎で入院してしまったそうです。

大学院の修士課程で行ったゴミの調査では、「環境問題やリサイクルを意識している人は少ないが、売れるモノは何でも売ってしまうという意気込みがあるので、何となくモノが循環している。しかし、ゴミ集積場でゴミを拾う人たちの労働環境は劣悪である。手袋などを付けていないと、

ケガをしたり、皮膚病になってしまう危険性も高い。」ということでした。

このような調査を通じて知り合ったインドネシアの人々は「たくましく生きている。日本人の弱さを痛感した。」という話に、学生さんから「日本人の弱さとは何？」という質問がありました。それに対して三上さんは「インドネシアでは、何でもあり、何とかなるさという心構えが必要。電車やバスも来るときは来るし、来ないときは来ない。気候の違いもあり、日本と同じようには行動できない。また、衛生面などでも、個人差はあるが日本人には暮らせない人もいるのでは。環境の適応能力が必要」と話されました。

授業の最後には、学生さんからプレゼントが贈呈され盛大な拍手で幕を閉じました。

三上さんの体験談を踏まえて、インドネシアについての全体像と人々の暮らしぶりを知ることができました。もっとゆっくり詳しく聞きたいという余韻を残し終わった授業でした。ぜひ、第2回を期待したいと思います。（高橋）



三上さんの授業を終えての感想... 

ジャワ島で体験したことを少しでも味わってもらえればと思って話していたら、あっという間に時間が過ぎてしまいました。また、あの「たくましい人々」に会いに行きたいですね。皆さんも学生のうちに、あちこち旅をしたり、色々なことを体験してみてください。



三上さんの「本と雑誌のちょっとした紹介」

図 書：アジアの言語、ヨーロッパの言語など  
『旅の指さし会話帳』情報センター出版局

雑 誌：国際協力、NGO、現地レポートなどについて  
『アジアワールド・トレンド』、『国際協力プラザ』  
『JICAフロンティア』、『OVTAグローバル人づくり』

\* 図書は本館、雑誌は分館に所蔵されています。